

インクルーシブ・インフォメーション【交流及び共同学習】

各教育事務所 教諭兼指導主事（特別支援教育エリアコーディネーター）
小笠原 志律 小野寺 輝子 佐々木 祐子
坂本 容子 野原 沙織 梅野 佳和
岩手県教育委員会事務局学校教育課 主任指導主事 五安城 正敏

はじめに

『いわて特別支援教育推進プラン（2019～2023）』では、これまでの推進プランの基本理念である「共に学び、共に育つ教育」を継承しつつ、すべての人が互いを尊重し、心豊かに主体的に生活することができる共生社会の実現を目指しています。

本県は、特別支援学校の児童生徒が居住する地域の学校に副次的な籍である「交流籍」をおいた交流及び共同学習を平成24年度から実施するなど、全国的にも先駆的な取組を展開しています。また、各特別支援学校では、地域の小中学校等との学校間交流についても長年積み重ねてきています。

新学習指導要領では、全ての校種の学習指導要領において、交流及び共同学習を計画的、組織的に行うことが示されています。今後、各校での交流及び共同学習がさらに充実したものとなるよう、本稿では、県内各地の近年の取組を紹介します。

1 「交流籍」を活用した小中学校と特別支援学校との交流及び共同学習

【小学校（同学年、異学年）と特別支援学校との取組】

久慈拓陽支援学校5年生は、居住する地域の小学校である洋野町立中野小学校を年に数回訪問し、体育や集会行事等の活動を一緒に取り組んでいます。

久慈拓陽の児童が訪問すると、中野小学校の児童が温かく出迎え、教室へ案内してくれています。

通常の学級の体育では、「しっぽとり」「なべなべそこぬけ」「体じゃんけん」を行いました。中野小学校の児童の動きを見ながら、笑顔で積極的に参加する久慈拓陽の児童でした。

これまでは、同学年同士の児童との交流でしたが、これまでの交流及び共同学習を踏まえて、初めて、中野小学校の全校児童が参加する「なかよし集会」を交流の場としました。事前に学習のねらいや活動を確認していたことから、久慈拓陽の児童は、当日も様々な学年の児童と関わりながら取り組んだり、コミュニケーションをとったりすることができました。

低学年の頃から継続して取組を重ねていることもあり、児童同士が互いのことを理解しながら積極的に関わったり、中野小学校の児童が、久慈拓陽の児童の苦手な活動や環境に対して自然に対応したりする様子が見られています。

【小学校（通常の学級、特別支援学級）と特別支援学校との取組】

盛岡みたけ支援学校、盛岡ひがし支援学校では、交流籍をおいた小学校での学習を行う際に、通常の学級と特別支援学級の両方で交流の機会をもっている児童がいます。

その中のひとつとして、盛岡みたけ支援学校2年生の児童が、盛岡市立緑が丘小学校の通常の学級と特別支援学級で交流及び共同学習を行った様子を紹介します。

特別支援学級の体育では、少人数でのリラックスした雰囲気の中、ビート板でボールを打ち合うやりとりを、教師や友達の動きをモデルにしながら盛岡みたけの児童が参加したり、友達のプレーを笑顔で応援したりする姿がみられました。

通常の学級での図工では、絵の具に洗剤を入れてストローで吹くことで泡を作り、画用紙につけていく活動を行いました。画用紙に泡がついた感じが素敵で、小学校の児童に「〇〇くん上手だね」と言われ、とても嬉しそうな盛岡みたけの児童でした。

その後、盛岡みたけの児童は、通常の学級と一緒に給食を食べてから下校しました。

継続的な交流及び共同学習により、小学校の児童から盛岡みたけの児童に話しかけたり、一緒に手をつないだりという様子や、盛岡みたけの児童も小学校の教員に「できたよ！」と元気に話す様子など、自然なかかわりがみられています。

【生徒主体による中学校と特別支援学校との取組】

陸前高田市立高田第一中学校と気仙光陵支援学校中学部との交流及び共同学習では、高田第一中学校が生徒の自主的な活動として「交流及び共同学習推進委員会」を立ち上げ、生徒主体で交流の企画や運営を行っています。

高田第一中学校は、竹駒小学校から、交流籍を活用した交流及び共同学習を6年間積み重ねた生徒たちが入学してきており、その生徒たちが推進委員会に積極的に立候補し、気仙光陵の生徒の実態を理解しながら活動計画を立てています。

気仙光陵の生徒は、言葉でのやりとりが難しいことや、突然大きな集団に入ると不安になるということがあることから、まずは特別支援学級で、少人数の生徒と自己紹介をしたり、歓迎のダンスを見たりして楽しみました。

その後、段階的に人数を増やし、推進委員の生徒が気仙光陵の生徒を迎えに行き、同じ学年の生徒たちとの交流に結び付けることができました。同じ学年の生徒との交流では、オリンピックをテーマにして聖火リレーや歓迎の合唱、ダンス、ジェスチャーゲームを行いました。気仙光陵の生徒は、合唱やダンスに合わせて声を出したり手をたたいたり、ジェスチャーゲームでマイクを向けられると推進委員の生徒の言葉がけを真似して発声したりするなど、友達の関わりを受け入れている様子が見られました。その後も高田第一中学校の友達に車椅子を押してもらうなどして、大人数での活動を楽しむことができました。

このように成長してほしいという生徒への願いを明確にし、生徒による主体的な取組を支え、新しい世紀の道を拓きゆく高田第一中学校と気仙光陵の交流及び共同学習です。

2 小中学校と特別支援学校との学校間の交流及び共同学習

【小学校と特別支援学校とのオンラインによる取組】

令和2年度は、コロナ禍を踏まえて、例年行っている一戸町立奥中山小学校1年生と盛岡みたけ支援学校奥中山校小学部との交流及び共同学習をオンラインで行いました。

初めてのオンラインでの交流であったためか、最初は互いの児童に緊張と興味が入り混じった様子がみられました。交流が進むにつれて徐々に慣れてきたようで、クイズやダンスなど画面越しでの交流に意欲的に取り組む様子が見られるようになりました。

オンラインでの交流であることに加えて、マスクを着用しての交流であることから、互いの表情や雰囲気が伝わりにくい面もありましたが、一方では、相手に何とか伝えようと、

クイズの正解の際に両手で大きな輪をつくったり、いつもより大きな動作で拍手をしたりと伝え方を工夫する様子がみられました。

コロナ禍で様々な制限がある中での実施でしたが、画面越しとはいえ、リアルタイムで互いの表情を見ながら、今年度も交流及び共同学習を継続することができたことは、子どもたちにとっても学校にとっても大きな財産となりました。

【中学校と特別支援学校との行事を通した取組】

花巻市立西南中学校では、1年生の生徒がレクリエーションを企画し、花巻清風支援学校の中学部1・2年生を招待しています。

両校では、事前に自己紹介カードを作成・交換し、どのような生徒たちと交流するのか見通しとワクワク感をもって当日を迎えています。また、西南中学校の生徒は、花巻清風の生徒が楽しめるようにと、ボッチャを含めた数種類の活動を手作りで準備しました（ボッチャのボールは、本物と同じような質感で、花巻清風の職員が作り方を聞いてしまうほどの出来栄でした）。

交流当日は、五つのグループに分かれて、生徒たちが笑顔で関わり合いながら活動を楽しみ、その後の閉会式では、各校で練習してきた合唱を発表し合いました。

交流後、花巻清風では、作業学習で作成した紙すきによるハガキを使って、西南中学校宛てのクリスマスカードを作成しプレゼントしました。

丁寧な事前・事後学習に加えて、生徒個々が関わり合う活動、合唱等で集団同士が関わり合う活動と多様な活動を設定することにより、互いを理解・尊重する気持ちが育まれている交流及び共同学習です。

【中学校と特別支援学校との行事を通した取組】

宮古市立崎山中学校と宮古恵風支援学校は、年間を通じて交流及び共同学習を行い、特に宮古恵風の運動会では、以下のような内容で取り組んでいます。

運動会に向けた取組の事前学習として、宮古恵風の職員が、崎山中学校を訪問し、宮古恵風中学部の様子や生徒の様子、車椅子操作を含めた関わり方の基礎事項についての授業を行い、「心のバリアフリー」の理解につなげています。

宮古恵風の運動会予行練習を全体の交流及び共同学習の場として位置付け、崎山中学校の生徒が中学部競技に参加したり、宮古恵風の生徒と一緒に応援したりして交流を深めています。

運動会当日も土曜日に行われるにもかかわらず、約40名の崎山中学校の生徒がボランティアとして参加することを希望し、用具係など運営の手伝いをしています。中学校の生徒自身が積極的に地域の仲間とかかわろうとする姿がみられています。

【中学校と特別支援学校との部活動を通した取組】

一関第一高等学校附属中学校と一関清明支援学校は、年に3回、陸上競技部での練習を通した交流及び共同学習を行っています。

一関清明の中学部生徒のうち、1・2回目は岩手県障がい者スポーツ大会に参加する生徒、3回目は花泉マラソンに参加する生徒が、一関一高附属中学校陸上競技部の練習に参加しています。

一関一高附属中学校の生徒は、顧問の先生の指示がなくても、自分の隣に一関清明の生徒を迎えて準備体操やウォーミングアップ動作を教えたり、タイム計測の際に自分が走り終わっても一関清明の生徒と一緒に走り続けたりという様子がみられ、周囲の教員や生徒の心を温かくしてくれています。

一関清明の生徒は、同年代の生徒とかかわりながら陸上競技の基礎を学んだことにより、普段の練習に対する姿勢が変化し、各種大会にも自信をもって参加しています。

3 高等学校と特別支援学校との学校間の交流及び共同学習

【高等学校の専門性を生かした特別支援学校との取組】

宮古水産高等学校食品家政科は、水産食品を中心とした製造流通や家庭生活に関する知識と技術を学んでいます。その専門性を生かして、宮古恵風支援学校と新巻鮭づくりを通じた交流及び共同学習を行っています。

例年11月中旬～12月、宮古恵風高等部1年生が宮古水産高校を訪問し、腹裂き・洗い・塩すりの各グループに分かれて宮古水産高校の生徒から作り方を教わります。宮古水産高校の生徒にとっては、教えることを通して学んできたことの確認や、他者とのコミュニケーション方法の理解につなげるとともに、教えることの喜びを感じる機会ともなっています。宮古恵風の生徒にとっては、同年代の生徒と一緒に学ぶ貴重な機会であるとともに、新たな力を発揮する機会ともなっています。

宮古水産高校のある生徒は、「(宮古恵風の生徒と) 中学校が同じだったけれど、クラスが違っていたので、今まであまり話したことがなかった。今日は、中学校のときの話で盛り上がった。」ということをお話していました。

【高等学校と特別支援学校との部活動を通じた取組】

一関第二高等学校と一関清明支援学校は、年に3回、太鼓による交流及び共同学習を行っています。

毎年1回目は、一関二高太鼓道場部の生徒が一関清明中学部の生徒へ、ばちの持ち方や構え方など、基本的な事柄を教えています。また、一関二高の生徒による、太鼓の種類ごとの打ち方や音色の違いの紹介・実演に加えて、笛や三味線などの太鼓以外の楽器演奏やフラッグ演舞等もあり、一関清明中学部の生徒にとって、大きな刺激となっています。

2回目以降は、一関清明の「清明祭」での太鼓発表に向けて、それぞれのパートごとに一関二高の生徒が一関清明の生徒に実技指導を行い、練習の最後には「清明太鼓」という曲を一緒に演奏しています。

一関清明の生徒にとっては、高校生と一緒に演奏することでリズムよく太鼓を打ったり、身体全体を使って演奏したりできるようになっています。その成長を一関二高の生徒からほめてもらえることで大きな自信となっています。

一関二高の生徒にとっては、人に伝えることを学ぶ機会であり、太鼓のもつ魅力や人とつながることの素晴らしさを感じ、太鼓と改めて向き合う機会ともなっています。

この取組によって、一関清明の生徒が一関二高の演奏会を見に行ったり、一関二高の生徒が「清明祭」を見に行ったりと自然な交流にもつながっています。

4 小中学校内の特別支援学級との交流及び共同学習

【校内全教職員による取組】

盛岡市立仁王小学校では、通常の学級と特別支援学級との意図的・計画的な交流及び共同学習を含めた校内の特別支援教育を推進するために、以下のような取組を行っています。

- ◇特別支援学級の時間割を勘案しながら、全校の特別教室割当や通常の学級の時間割を編成。
- ◇特別支援学級担任団の職員室座席は、部屋の中央（教務主任の前）に配置。
- ◇年度当初、特別支援学級と交流学級の担任同士による、担任連絡会を実施し、児童の様子や今年度の交流及び共同学習のねらい・具体的な場面・必要な支援等を確認。
- ◇特別支援学級在籍児童の担任は、特別支援学級担任と交流学級である通常の学級（以下「交流学級」という。）担任の二人。交流学級児童の担任も、交流学級担任と特別支援学級担任の二人。
- ◇特別支援学級と交流学級の担任は、常に同一歩調で、両方の学級の児童に対して指導・支援。
- ◇特別支援学級の行事等には、交流学級担任だけではなく、校内全教職員もできるだけ参加。
- ◇交流学級担任は、特別支援学級の対外的な行事への参加を交流学級児童に伝え、特別支援学級在籍児童を応援するなどの児童主体の取組促進。特別支援学級担任は、交流学級の取組や思いを特別支援学級在籍児童に伝え、特別支援学級在籍児童が交流学級児童への感謝の気持ちを表すことができるように支援。
- ◇交流学級の行事等には、特別支援学級担任もできるだけ参加。
- ◇交流学級の通信には、特別支援学級在籍児童の交流学級での様子を掲載。
- ◇交流学級の壁面には、交流学級児童の自己紹介カードと、特別支援学級在籍児童の自己紹介カードを掲示。
- ◇特別支援学級担任は、必要に応じて、各学年会に参加。

仁王小学校では、盛岡視覚支援学校と年間を通じた学校間交流も積み重ねてきています。

このような交流及び共同学習が、途切れることなく、年々充実した取り組みとなっているのは、仁王小学校の全教職員が、一人一人の子どもをかけがえのない存在として教育される権利主体であることを厳粛に確認しているからであり、特別支援学級の開設以来、この経営を通して、すべての職員に個人差に徹する教育の意義を浸透させていくことを大切にしているからです。

おわりに

現在・将来の共生社会の実現のためには、各校で学んでいる児童生徒等が、交流及び共同学習を通して豊かな社会性や人間性、多様性を尊重する心を育てていくことが大切です。

また、教員自身が、子ども時代にはできなかった豊かな体験を通して、教員としての素養を高め、教育実践や地域社会の一員としての取組をさらに充実させていくことが大切です。